

「地名の果たす役割」

群馬県立女子大学教授 北川 和 秀

- ① 天離る夷の長道ゆ恋ひ来れば明石の門より大和島見ゆ (三・二五五) 柿本人麻呂
- ② 引馬野にほふ榛原入り乱り衣にほはせ旅のしるしに (一・五七) 長奥麻呂
- ③ 馬の歩み押さへ止めよ住吉の岸の黄土にほひて行かむ (六・一〇〇二) 安倍豊継
- ④ やすみしし わご大王 高照らす 日の皇子 荒栲の 藤井が原に 大御門 始め給ひて 埴安の 埴の上に あり立たし 見し給へば
- 大和の 青香具山は 日の経の 大御門に 春山と 繁さび立てり
- 畝火の この瑞山は 日の緯の 大御門に 瑞山と 山さびいます
- 耳成の 青菅山は 背面の 大御門に 宜しなべ 神さび立てり
- 名くはし 吉野の山は 影面の 大御門ゆ 雲居にそ 遠くありける
- 高知るや 天の御蔭 天知るや 日の御蔭の 水こそば 常にあらめ 御井の清水 (一・五二)

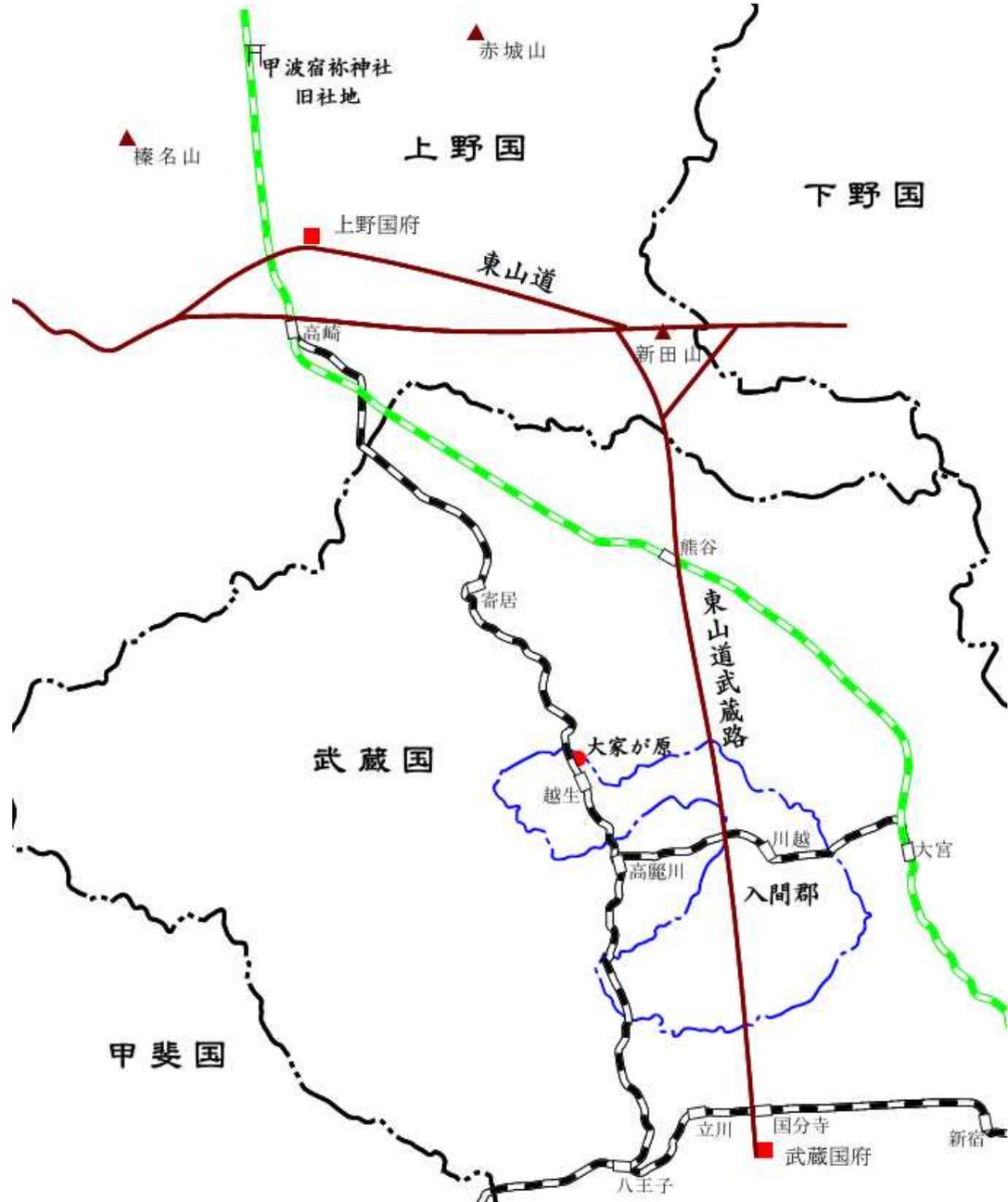
- ⑤ 日の暮に碓氷の山を越ゆる日は夫なのが袖もさやに振らしつ (三四〇二) 上野
- ⑥ 新田山嶺には着かなな吾によそり間なる子らしあやに愛しも (三四〇八) 上野
- ⑦ 利根川の川瀬も知らず直渡り波にあふのす逢へる君かも (三四一三) 上野
- ⑧ 伊香保嶺に雷な鳴りそね吾が上には故はなけども子らによりてそ (三四二一) 上野
- ⑨ 伊香保風吹く日吹かぬ日ありと言へど吾が恋のみし時なかりけり (三四二二) 上野
- ⑩ 上毛野伊香保の嶺ろに降る雪の行き過ぎかてぬ妹が家のあたり (三四二三) 上野
- ⑪ 上毛野乎度の多杼里が川路にも子らは逢はなも一人のみして (三四〇五) 上野
- \* 上毛野小野の多杼里が安波治にも夫なは逢はなも見る人なしに (同 或本) 上野

- ⑫ 真金吹く丹生の真朱の色に出て言はなくのみそ吾が恋ふらくは (一四・三五六〇) 未勘国東歌
- ⑬ 白真砂御津の埴生の色に出て言はなくのみそ吾が恋ふらくは (一一・二七二五) 寄物陳思

- ⑭ 上毛野伊奈良の沼の大藺草外に見しよは今こそ勝れ (三四一七) 上野
- ⑮ 淡海の手沈着く白玉知らずして恋せしよりは今こそ勝れ (一一・二四四五) 人麻呂歌集

\* 伊香保風吹く日吹かぬ日ありと言へど吾が恋のみし時なかりけり (三四二二) 上野

- ⑯ 韓 亭能許の浦波立たぬ日はあれども家に恋ひぬ日はなし (一五・三六七〇) 遣新羅使人



西の方はるかに川嶋と聞えて、こゝにも甲波すくねの社を見やりたるは、これなん光明院がつかさどれるなりけり。うのとしのわざはひに、其地さへながれうせて、その社は南の方三四町ばかりひきしりぞきて作りたてたるとぞ。……名に高きかほやが沼も、むかしこの境内に有けるを、近き頃となりては佛すらなくなりしうへ、また其地さへぞうせはてたる。

(奈佐勝臯『山吹日記』天明六年1786五月十三日条)

\*「うのとしのわざはひ」は天明三年の浅間山の大噴火によつてもたらされた災害

- ① 風早の三穂の浦廻を漕ぐ舟の舟人さわく波立つらしも (七・一二二八) 古集中
- ② 葛飾の真間の浦廻を漕ぐ船の船人さわく波立つらしも (一四・三三四九) 下総国東歌
- ③ 入間路の大家が原のいはる蔓引かばぬるぬる吾にな絶えそね (一四・三三七八) 武蔵国東歌
- ④ 上毛野可保夜が沼のいはる蔓引かばぬれつつ吾をな絶えそね (三四一六) 上野

《参考》